

第十二回

少白と詩

太田玉茗賞

ふきのコトバ

町田理樹

かんどう、されましたっけね
ほんちようどおりのアーケードが、まだ
ゆきにおおわれ、うずたかかったころ
おこづかいが、ほったんだったか
しんろをめぐる、はなしだったか
つまらないコトバが
つまらないしかたで、つきささって

かんどう、されましたっけね
はるをつげるはずだった
こちらのあおいメモ、そちらのきいろいメモ
てれくさいのかなんのか
なかなか力才をだせず
かかれたものをみせることも
えがいたすがたを、はなすこともできなくて

おしだまつたまま、はしをまわす
ひとこともかわさず

うつむきあつて、ニシンのかけそば
じゅうごねんぶり、みせさきをとおりかかり
ゆきのとけた
いえ、つもることすらなくなった
むきだしのアーケードのした
まだあおいままのメが、ひとり
ひとりきり

おてらさんがいうんです
さいごに、つたえたいことをしつかりかいて
おひつぎのなかにいれてあげてくださいね
はくしのままの
くうはくのねんげつが、ひそり
はなばなのあいだにもぐりこんで

なにもかくことのできぬテと
なにもかきかえすことのできなくなつたテの
ひろがりどおしの、ときのはなれを
いきさきのなくなつたコトバが
ただしずかに、ふりこめていつて

第十二回

・
少
百
七
也
の
詩

宮澤章二賞

海の手紙

南雲和代

僕は誰なのか

母は最期までこの国のことばを話さなかった
僕には十五才までことばがなかった
沈黙の世界をただよっていた
僕には母のことばもこの国のことばも
どちらもなかった

僕の国はどこなのか

母が生きていることを放棄し僕を捨てた日
僕は戸籍がないことを知らされた
父と母は難民だったという
小さなボートで父と母は故国を捨てた
僕は母を守りたかった
だから この国のことばしか話せない
僕の故郷はあるのか

僕の褐色の肌は
蜃気楼のような海のかなたを夢に見た
いくたびの季節が
茫洋としたまま
時間を重ね
多くの人が殺戮された東の国が
僕の故郷だと知らされた

僕は誰なのか

父と母の骨と僕の爪を入れた手紙を
東京湾に流した
手紙は都会の汚れた湾岸に迷い込んできた
小さな魚に呑み込まれ
いつか
父と母と僕の故郷にとどくだろうか

第十二回

・
小宮七士の詩

優
秀
賞

キャベツと青虫

梶

あずさ

手紙を書きかけて
心の離陸をひそかに待っている
右手の親指と人差し指の間に
さつきまで畑で一匹一匹つぶしていた
キャベツの青虫の柔らかな感触が蘇る
生業故に残る後味
姑は賢く
水を入れたペットボトルに
ポトンポトンと落としていく
昨日テレビの取り付けに来た若い店員が
わが家の生業のことを
「趣味やろう」と言い
農業だけで食べていけない現実が
「そうだそうだ」と相槌を打つ
一匹一匹青虫をつかまえて殺すことは
趣味でやれるはずもない
人と人との間の空気の隙間に
落ちて来るような柔らかな雨

キャベツに水滴がつき
青虫も見つけにくくなる
やらねばならぬことながら
工夫したペットボトルにさえ
また嫌気がさすのだが
青虫よりキャベツが大事という
錦の御旗がヒラヒラする
小学教師だった兄が
「青虫を子供たちに育てさせたいが何匹かいるか？」
と聞いてきた
私はそれこそ喜んでキャベツの葉もつけて
青虫を持っていつてもらおうことにした
手紙を託す気持ちで
夢想の中にいるなら悲しみは消えない
強く生きようと自分に誓うことだ
現実という名のこの岩を前にして

一枚の皿

長
幅
愛

どでん どでん と机が鳴って

ばたん ばたん と土が鳴って

すー すー と糸が通って

皿ができました

つやつやとした飴釉の

まあるい一枚の皿

先生の逝ったあと

ある日突然に

私の前に現れたこの皿は

ふるさを去り

陶芸から離れてしまった

私へのお便りですか

汚れを拭いて

飾りました

波打つ雲を練りこんだような

まあ一枚の

お便りです

わたしの町の循環バス

三好郁子

道祖町バス停から

お婆さんが一人 よいこらしよ

薄荷のような湿布薬の匂いがする

道祖神は邪霊の進入を防ぐ神

お婆さん痛いところはさすがに治ります

荒木バス停からはベレー帽のお爺さん

セーラー服の女の子が立ち上がった

どうぞ ありがとう

荒木は新しく伐り墾くの意 ここは昔は荒地

香山公園五重塔バス停から

中年太りのサラリーマン

一番前の見晴らしの良い席にどんと座る

広い背中に優雅な国宝五重塔も隠れてしま

次は大殿大路

お降りの方はお知らせ下さい

ここには大内時代の殿様の居館がありました

発掘作業で金の瓦が出てきたのです

右に曲がります お気をつけて下さい

伊勢大路前からシヨートカットの娘さん
座るとすぐに仰向いて目薬をポトン
龍福寺の燃える紅葉がよく見えますか
鱈石橋バス停前には大石が二つ重なっている
むかし昔 岩側で紅白重ね餅が売られていた
この川の上流 ほらあそこが刑場跡
窓を閉めましょう
ときたま血の匂いがすると珠子さんは言う
新馬場バス停 すなわち調馬の馬場なりき
小さい子がポンと飛んで降りてバイバイ
六百年前大内氏によつて
京都を模して作られた町 山口
大内から毛利そして維新の長州へ
御局小路に円政寺 金古會 唐人小路
循環バスに乗ると
前垂れ姿の丁稚さん ちよん髷結つたお侍
お姫様まで乗り込んできます
飛脚が走つて飛び乗つて
古い地名から遠い昔の人達の
暮らしを綴つた手紙が届きます
皆さん ご機嫌よくお暮らしますか

イスタンブールの風

江端芳枝

※トルコの母からのメールには
メルジメツキ・チヨルバスの作り方と
生まれたばかりの兄の子どものことが
書かれていた

愛する人と暮らすために
家族も仕事もトルコに置いて
日本に来た

遠く離れているが
メールを開けば
いつだって
イスタンブールから風が吹いてくる
私の名前を入れて子守唄を歌う
母の声が聞こえる
アテムはどこにいるの
アテムは日本にいるよ
アテムはどこにいるの

アデムは日本にいるよ

妻のお母さんからは
メールも手紙も来る

妻は

来た手紙を台所に貼って
時々読んでいる

メールは早くて便利だけど

特別な時はやっぱり手紙ね

言葉を手に持って読めるんだよ

お母さんからの手紙をなでながら
妻が言う

もう少し日本で暮らしたら

妻のように

紙の手紙が

欲しくなるかもしれない

※トルコの代表的な家庭料理

とおせんぼ

小林 百合子

いい子にして、ばあちゃんの言うこと聞きな
こっちはあぶないからね
母ちゃんの丁寧な字
茶封筒から新しい千代紙も出てきた
学校で友達にもあげよう
縁故疎開で転校してきた私
仲良くしてくれる友達に
さよならまた明日ね
小学校からの帰り道
どこからか二人の男の子
私の前で両手を大きく広げて
「とおせんぼ、とおせんぼ」
右へくぐろうとすれば右に寄り
左をくぐろうとすれば左へ寄る
汗と土で汚れた服の学校で見掛けない子たち
「余所もんはけえれ」
「東京へけえれ」
全身が熱くなって涙が出てきた

「おめえら何してんだあ」
知らないおじさんの大声
ぎいと自転車が止まる
意地悪な子たちはさつと逃げていく
「おめも早くけえれよ」
水を引いた田んぼを細波が渡っていく
日曜日の朝、ばあちゃんに嘘をつく
忘れ物を取りにいくつて
もらつたお金で東武電車に乗つて
一人で大塚の家に帰る
でもたくさん怒られた
母ちゃんも姉ちゃんたちも呆れ顔
昨夜もサイレンが鳴つたんだよ
飛行機の音が聞こえたよ、空襲があるよ
疎開先からこつそり戻つて死んだ子もいたよ
明日送つていくから羽生に帰りな
懐かしいにおいの町も家も
もう帰る所じゃなくなつたのかな
ただいまつて、もう言えないのかな

第十二回

● 小宮と詩

奨励賞

父を恋ふる文字

戸田和樹

「てが くすぐつとうて

じが じょうずにかけへん」

雪を触った後

孫娘が言う

それを

「か・じ・か・む」

って言うんやで

頼りない手の感覚は

昔

伊吹嵐の吹く故郷の土地

使わなくなつた桑畑で

靴した手の甲を撫でながら

桑の木を掘り起した感覚と似ている

絹は合織に取って代わられ

百姓はみな桑畑を捨てた時代があつた

父は百姓を捨て遠い町に働きに出た

月に一度

いや月に二度

ぼくは拙い文字で父に手紙を書いた

悴む手で書く「し」の文字は

妙に長く歪んでいた

半年ぶりに帰った父は

「お前の手紙の『し』の文字は

ぶるぶる震えているなあ」

と笑った

笑う父の赤銅色に日焼けした顔

その顔に刻まれた皺から滲み出る

小作農の寂しさ

故郷に

空つ風が吹く

空つ風に吹かれて

故郷も父も細つていく

細つたものを握ろうとして手が悴むのだ

悴んだ手をいつも

やさしく母が包んでくれていた

シヤケ

長谷川 美 雪

上京してほどなく
母親から手紙が届いた
生まれて初めての
母親からの手紙

息せききつて封をあけると
無造作にたたまれた便箋が
白い封筒から顔をのぞかせた

シヤケ送る

便箋のまん中に、これきり
母親のことだ
おそらくシヤケが
そっくり一匹やってくる
生まれて初めて届いた
母親からの手紙

そのおかしさに
拍子も抜けたが
もろもろの緊張も
ぶっ飛んだ

おぼえているよ

れ

あ

わたしが木刀を振る
黒くて太い木刀だ
父からもらってずっと使っていた
その隣で同じ年頃の少年が
同じように木刀を振っている
そんなかつての日々を見た

わたしが柱をのぼる
一番上までのぼって天井にさわる
つめたい天井が指先に触れる
その感覚が消えぬうちに
豊へと飛び降りる
そんなかつての日々を見た

わたしが川の水をすくう
手の中でオタマジャクシがはねる
ピチピチはねてむずがゆい
つかまえてカエルになるまで飼う

そんなかつての日々を見た

はるか遠くなつてしまつたふるさとの
その地に生きるわたしがいる
時たまかつてのわたしの夢を見る
なつかしいあの手ざわりを
夢の中でふたたびなぞる

ふるさとの夢は

かつてのわたしからの手紙

ここにいるよ

おぼえているよ

元気でやれよ

そうささやいてエールをおくる
わたしからの手紙

空き地が手紙を書いたなら

各務 奈津美

入道雲からの手紙には
夏休みに空で胸を張るよって書いてあった
違うよ 胸を張るのは僕
夏休みは僕の誕生日があるから
蝉からの手紙には
夏休みに飛び回るよって書いてあった
違うよ 飛び回るのは僕
朝からたくさん遊ぶから
盆踊りからの手紙には
夏休みに夜を照らすよって書いてあった
違うよ 夜を照らすのは僕
玄関の前で花火をするから
プールからの手紙には
夏休みに水しぶきを上げるよって書いてあった
違うよ 水しぶきを上げるのは僕
あきれくくらいはしゃぐから
近所の空き地からの手紙には
夏休みに来るのを待ってるよって書いてあった

もちろん行くよ 毎日行くよ
雨の日だつて行っちゃうから
たくさん遊んだ夏休み
日焼けした夏休み
大人になった僕には 二度と会えない夏休み
近所の空き地はなくなつて
家が三軒建つていた
空き地が手紙を書いたなら
忘れないでとつづつたろうか
あの子の家もなくなつて
知らない家族が住んでいた
喫茶店もなくなつて
コインランドリーになつていた
あの子の家が手紙を書いたなら
もう一度あの子に会いたいとつづつたろうか
喫茶店が手紙を書いたなら
コーヒーの香りが恋しいとつづつたろうか

字

松本清美

現金封筒にだけ添えられた
父からの手紙

「お元気ですか

わたしたちは元気です

体に気を付けて」

いつも変わらないことば

小学生が書いたほうが上手いような字

ある時少し長い手紙が添えられた

そつのない文面に

少し右肩あがりのまとまった字

字の練習でもしたんだろうか

一枚の手紙をじっと見つめた

ちよつと得意げなすましたような字

やっぱり父の字じゃない

父なら

「へへ」と困って笑ったような

玄関に鍵もかけず

ステテコ履いて寝っ転がったような
野良猫が喜んでついてくるような
そんな字をしている

書くのが好きなご近所さんに
書いてもらったらしい
当たり前だと思っていた父の字が
目の前から消えてうろたえた
いとおいしい大事な字だと初めて気づいた

「代筆なんか頼まなくていいのに
おとうさんの字でいいのに」
口にしながらも心の底伝えきれない
また代筆なんて本当はまっぴらだ
つかえていたことばを押し出した
「代筆なんか絶対だめだよ！
おとうさんの字がいいんだからね！」
眉を八の字にして
困ったような笑ったような顔をして
受話器を持つ父が見えた

なんてん

鋤子 ふたみ

母さんからのふるさと便り
頼んでおいた服や本
荷物にまぎれて
赤い実がこぼれた
てのひらほどの南天が一枝
難を転ずるおまじない

大丈夫 必ずうまくいく
泣くと力がなくなるからね
楽しいことを見つけて笑いなさい
あなたならできる
きつとできるよ

あわてて歯を食いしばったけど
涙があふれた

母さんからのふるさと便り
手編みのマフラー

神社のお守り

桜色の貝殻にはふるさとの

潮の香りがつまってる

それからそれから

おかしにふりかけチョコレート

こんなところでも売ってるよ

だけどあけるのもつたいなくて

袋のまんま抱きしめる

南天を窓辺に飾ったら

ほんの少し

笑顔がつくれた

置き手紙

斉藤 礼子

亡くなった母の衣類を片づけようとして
洋服筆筒をあけると
紙の箱がぽつんと置かれていた

箱には 包装されたままの薄緑のセーター
造花のカーネーション一輪
ちらしを切ったメモ用紙が添えられていて
——よしみさんの歌を聞きに行つてきます
マジックペンで書かれた母の文字
となり小さく妹の文字
——気に入つて貰えるかわかりませんが
着てください

母は 姉の民謡の発表会に出かけるからと
妹にメモを残し
留守の間に実家を訪れた妹は
母の文字のとなりに窮屈そうにメモを記し
母の日のプレゼントを置いて帰ったのだ

それを見て
姉 私 妹 娘ばかり三人姉妹の
末っ子の妹は 中学生になっても
母と一緒に布団で寝ていたことを思い出した

—— 何で連れて行かなあかんの
妹の柩が運び出されようとしたとき
静まりかえった広い斎場に
老いた母の声が響いた

亡くなった母の筆筒の扉をあけた
ただそれだけのことだけれど
部屋の隅の ささやかな筆筒の扉からも
音立てて 洪水のように流れ出してくる
母と妹の
残されたものたちへの 置き手紙のような
日々

氷室

高木道浩

今年も雪が降った
アイロンの手を休め
男はテレビのニュースで
ふるさとの季節の便りを知る
男はふるさとは帰らない
帰れない
職場でも 親しい人にも
何も話さない
胸の奥に一人で事情を抱え込む
クリーニング職人一筋の人生
アイロンを握り続けた手は硬く
しわが深く刻まれている
今年もふるさとに雪が降った
都会の澄んだ青空を見上げ
男は昔遊んだ田んぼを思う

走り回った雪合戦
いびつな雪だるま
木々の間からは日本海の荒波が見える

都会では

最期を看取る身内もいなかった

一人用のちゃぶ台

クリーニングされた背広

一人暮らしの部屋は整然と片付いていた

部屋の隅に落ちていた新聞の切り抜き

ふるさとの氷室の雪が

都会のこの地に贈られることを伝える記事

男はいつも

ふるさとの便りを待っていたのだ

氷室の雪はまぶしく溶けているか

一筆書き

大坪 覚

冬の日差しがたちまちのうちに
刺すように冷たい風と雨
父の墓のある土地
自分の名義になった家
枯れてしまった梅の古木

弱い人間を拒むような空間に
父は毎週通った
どうしても守らなくてはいけないもの
口に出すことなく
父というひとりの人間のことが
週末ごとにわたしの襟首をつかまえる

帰るさ
帰ることに決まっている
誰かに言われたわけではなく
懐かしいという感情ではなく
激しくて厳しい何かが

わたしを既に呑み込んでいる
逃げるように離れた土地
友人はひとりもいなくても
死に場所というわけではなく
長い長い一筆書きが元に戻るように
何事もなかった顔つきで
わたしは駅を出て古い家の鍵を探す

春の種

和井田 勢 津

今年が遅かったなあ

遠い窓に初雪を見つけ 母はつぶやいた

翌日「面会禁止」の紙が貼られ

病室への橋がはずされた

通えるのは

手紙を添えた差し入れだけになった

みかんと白ぶどうと「がんばって」

すりおろしりんごとカステラと「元気か」

プリンとヨーグルトと「大丈夫だから」

バナナとゼリーと「家の方は心配しないで」

富士山の水ペットボトルと「また来るよ」

朝露のようにたよりない一本の糸を

やじろべえのようにあやうく伝って

向こう岸に吸い込まれていった

その度に 律儀な母は

返事をよこした

震える指で押した
六文字のひらがなが
見えない糸を伝つて届いた

ありがとうさん
だいじょうぶ
がんばります
たのみますよ
じゃあまたね

しずかにつもる あけがたの雪
あかるくひかる ちいさな足跡
点々とこぼれているのは 母の声だ
拾い集めて

わたしは全部飲み込んでしまった

二月 胃袋でひらがなは発芽し
そつとわたしをあたたためてくれるだろう
三月 体中に花びらは満ち
やわらかくわたしを包んでくれるだろう

母の手紙は 春の種だった

第十二回

ふるさと
の詩

市民奨励賞

「雲上ポスト幻影」

結城道落

内職の手仕事、フト手を停めて
作業所通りに
ポストが佇む
オヤジ！ 俺は今は、ナア！
「働らいてんだデー！」
落涙耐えて
詫び状の文面一条記す
トンテンカン トンテンカン
トンテンカン トンテンカン
トンテンカン！ トンテンカン！
これしかねえ、これしかねえ！
今さら、どうしようもねえ
記した手紙破り捨て
青空の下、遙か遠くのポストへ歩く
洗濯機、回る下着を見つめては
グループホーム通りに
ポストが佇む
オフクロ！ 俺は今は、ナア！

「真面目なんだデー！」

落涙のまま

詫び状の文面一条記す

セッセコラサ セッセコラサ

セッセコラサ セッセコラサ

セッセコラサ！ セッセコラサ！

これしかねえ、これしかねえ！

今さら、どうしようもねえ！

記した手紙破り捨て

星空の上、いつの日か行くポストへ歩く

須影のクロマツと

金 森 孝 枝

筑波山から最初の空っ風が吹き降りた
郵便受けの蓋に葉を一枚挟んで過ぎる

図書館への訪問が間遠になると届く便り

今日は先端を紅色に染めた柿の葉

蜜吸いのメジロの声の時もあつた

入口フロアを郷土資料館へそれると

須影八幡神社のクロマツが待つ

蟹のはさみが連なる輪切りの姿でも

御神木とあがめられた巨大さがわかる

あらわになつた三百本の年輪

松くい虫に侵され ひび割れ

ところどころ滑り落ちた「時」もあるが

生き抜いた年と気候変動をくるいなく記す

参拝の人々の願いや祈りも綴り

ひと輪ひと輪が封印された書簡

明治四十二年 田山花袋「田舎教師」出版の
案内が貼られた年を開封する

主人公が勤めた弥勒小学校への道をなぞる

大型トラックにおおられ汗だくの四里

今も続く藍染め工場に足を延ばす

知らなかつたふるさとの景色が一步近づく

戦や天災も示され

開封すること重度を増す

訪ねられなかつた間にしたためた文を読む
外から十三番めの輪に指をかざして

十八歳 就職し羽生を離れた年

幾度も居を移し どこにも居つけなかつた

帰郷し 年輪の外に年を重ねても

見知らぬ土地へ飛び立ちたい衝動にかられる

一所に立ち続けたクロマツの一生が

揺らぐ私の幹に 根の存在を気づかせる

互いの内を探る内密の文通は続く

図書館の庭で落ち葉を拾う高校生がいる
クロマツからの手紙と感じる者だろうか

明治四十二年 田山花袋「田舎教師」出版の
案内が貼られた年を開封する

主人公が勤めた弥勒小学校への道をなぞる

大型トラックにあおられ汗だくの四里

今も続く藍染め工場に足を延ばす

知らなかつたふるさとの景色が一步近づく

戦や天災も示され

開封するごと重度を増す

訪ねられなかつた間にしたためた文を読む

外から十三番めの輪に指をかざして

十八歳 就職し羽生を離れた年

幾度も居を移し どこにも居つけなかつた

帰郷し 年輪の外に年を重ねても

見知らぬ土地へ飛び立ちたい衝動にかられる

一所に立ち続けたクロマツの一生が

揺らぐ私の幹に 根の存在を気づかせる

互いの内を探る内密の文通は続く

図書館の庭で落ち葉を拾う高校生がいる
クロマツからの手紙と感ずる者だろうか

父からの手紙

高田昭子

父は大地主の十一番目の子ども
財産を減らさないため

婿に入る定め

機屋はたやの娘と見合い結婚

だが商売にむいてなかった

父は接待に明け暮れ帰りは午前様

酔っぱらって吐いたり

玄関で寝ていたり

肝臓に効くと言つて

いつも蜆の味噌汁を飲んでいた

父が夕食にいないのは当たり前

たまにいと子ども心に窮屈

結局機屋はたやは潰れた

大学に入って間もなく来た父からの手紙
全文漢字とカタカナ
びっくり！

読みづらーい！
「勉強しスポーツに励み 友達をつくれ」
返事を書かなかった

今ならわかる

忙しいのに書いてくれた手紙

父の精いつばいの愛情を

父は大学一年の時学徒動員

勉強を諦め戦争へ

やっとの思いで帰国、復学したけれど

外交官になる夢は果たせなかつたから

生涯でたった一度貰った父からの手紙

父の心情がわからなかつた私

なくしてしまつた

白い封筒に古屋昭子様と書かれた父の字

便箋には漢字交じりのカタカナ

時々思い出して

父を感じて 幸せな気持ちになる